

〔巻頭言〕

かわることと、かわらないこと

岩 村 祥 吉

SPF豚研究会の会長をさせて頂いて1年が経過しました。この大役をなんとかこなせているのは、2名の副会長の強力なサポートがあったからこそです。特に、林哲氏は、生産現場からのご意見をいただき、会の運営に大変お世話になりました。お仕事の都合で、林氏が副会長を辞されたのは残念ですが、その後を名越仁宣氏にお引き受け頂け、現場からのご意見を引き続き頂ける体制になっています。副会長のおひとりが替わられましたが、SPF豚研究会の体制は変わることなく続きます。

さて、政治情勢や社会情勢もめまぐるしく変わっています。畜産関係においても、これまで禁止されていたアメリカ産牛肉の輸入が再開されることになり、牛肉の代替需要としての豚肉の消費量は影響を受けることも考えられます。また、食品衛生法に基づく「ポジティブリスト制度」の施行で動物用医薬品の取扱や記録をこれまで以上に厳重に実施しなければなりません。農水省の養豚問題懇談会が開催され、ホームページに公開されている配付資料によると経営問題、国際化対応、消費者ニーズ、環境問題、衛生問題についての行動計画案が示されています。このうち、衛生関係では、飼養・衛生管理の高度化のための研修会開催、人工授精の普及、チェックリストによる飼養衛生管理基準の遵守の推進、オーエスキー病の正

常化に向けた生産者のコンセンサス作りなどがあげられています。また、トレーサビリティや生産履歴についても取り上げられています。これらのことが実施されると生産現場でもこれまでとは違った手順や方法に替わることがあるかもしれませんが、安全で、安心な豚肉を安価に供給するスタンスは変わらないものでしょう。

私が所属しています動物衛生研究所も今年4月から非公務員型の独立行政法人研究所となったことに加え、これまでの研究部・研究室制から研究所長に直属する研究チーム制という新しい組織体制に替わりました。研究課題を解決するために、これまでよりも流動的な組織対応ができるようにすることと、ひとつの専門分野の枠を超えて複数の分野での協働により対処を図ることなどが理由です。しかし、「動物を守る，人を守る」をモットーに、畜産業の振興と食の安全・安心の確保に貢献するという目的は変わりません。

先日、SPF豚協会だよりに掲載されていたSPFポークを使った冷しゃぶサラダのレシピを何人かの主婦の方に紹介しました。調理の注意点として、「豚肉をしゃぶしゃぶするときに温度を上げすぎないようにするのがポイント。沸騰した中に入れるとせっかくのSPFポークのやわらかさが損なわれてかたくなってしまいます。」と書かれていたため、主婦の皆さんから、「豚肉はしっかり

熱を通さないといけないと思うが、大丈夫なのか」という質問を受けました。豚肉はしっかり加熱しないといけないということは母から子へしっかり伝えられており、この考えを変えるのは容易ではないようです。この質問については、「70～80年前にトリヒナという寄生虫が問題となって、それ以降しっかり火を通すという教育が徹底しました。しかし、現在はしっかり検査されていて、寄

生虫がいる豚肉が国内には流通することはないので、心配はいりません。しかし、食中毒対策としての加熱は必要です。」と答えて理解を得られたと思っています。ただ、長年教わり信じていることについて考えを変えるよう啓蒙するのは容易なことではないように思いました。地道にかつ積極的に正確な情報を発信していくことが必要だと思います。